



2012年8月1日
農学国際協力編集委員会

刊行によせて

今から約2年半前、農学知的支援ネットワーク（JISNAS）の主力メンバーによって「農学国際協力」誌の編集委員会が立ち上がりました。それから、さまざまな方々の応援を得ながら、ようやく本誌をみなさまのお手元にお届けできることとなりました。編集委員一同、心より、お礼を申し上げますとともに、これからの同誌の発展を見守っていただきたいと存じます。

名古屋大学農学国際教育協力センターが設立されて10年を超えました。この間、同センターは、「農学国際協力」という新しい学問分野を確立することを目標に研究活動を進めてきたところですが、そのためのプラットフォームとして、これまで発刊してきました「農学国際協力」をより学術性の高い雑誌として再出発させることとしました。したがって、本誌の目標は、国際協力という具体的な活動を抽象化し、ひとつの学問領域として確立するという理想を達成することです。そのためには、これまで埋もれてしまいがちであった農学国際協力の個々の事例や、またそのような国際協力を進めていく上でシーズとなる技術あるいは研究などを、学術論文として掲載し、本誌に記録していくことが重要であると考えております。

農学の中でも特に国際協力の分野こそは、農学により統合された知を現実社会へと適用していく分野であると考えられます。国内の食料自給率の向上に加えて、海外農地においても日本の技術力を最大限活用して農業生産力を強化していくためのノウハウや人材作りこそが重要です。日本において展開されている最先端の農学と海外の農業生産現場を結びつけていくことが、今の農学に求められているのではないのでしょうか。本誌はさまざまな農学国際協力の事例を蓄積していくと同時に、上に述べたようなトランスレーショナルな研究を刺激するための触媒としての役割も果たさなければいけないと考えています。

このような思いを持って再出発した本誌ですが、その内容や目標は世の中の趨勢に合わせて柔軟に対応し、絶え間なく改善していく必要があります。みなさまからの積極的な投稿やフィードバックをお待ちしています。

学術雑誌「農学国際協力」投稿要領

1. 刊行の目的

農林水産業は人間生活を保障する基幹産業である。その産業の発展を担う農学は、自然科学と社会科学が統合された高度に総合的な学問領域でなければならない。途上国が直面している食料不足、貧困ならびに環境破壊などの問題の解決には、既存の農学に加え、さらに現地に適応した技術体系の開発、農林水産物生産の技術面と経済面の相互調整、自然環境との調和、地域の仕組みや生活の知恵など地域資源をトータルに分析し利用する視点と、そのような視点で、現場の問題に取り組むことができる人材の育成は喫緊の課題となっている。

国際協力の一分野としての「農学国際協力」は、農学の基本理念に忠実に、国々の発展を基盤とした世界平和を構築するための人道的な見地からの協力はいうまでもなく、日本をはじめとする国々の国益という見地からも、相互の技術協力や人材育成を通して、世界の食料の安定的確保や地球環境保全、健全な農山漁村の発展に貢献することが求められている。

一方、日本の農学分野では、自然現象の科学的な解析・理解とそれらに基づいた先進的技術が主流であり、これらの基礎的な研究が農学分野の活性を支えている。農学における先進的研究をいかに国際的に展開させるか、またそれを世界的な問題の解決のためにどう用いていくかが「農学国際協力」の大きな課題の一つである。このような観点から、農学の研究成果を国際的に展開していくことへの理解や意欲を持った研究者を増やし、国際的な視野を持って、現在の農学研究を展開していく若者を養成する必要がある。

本誌はこのような観点から、以下のような課題に関する原著論文・総説およびその他の論文を掲載する。グローバルに展開する農林水産物の生産や流通、消費とそれらを保証する地球環境の自然科学的・社会的解析など、農学的視点から世界の実像を理解するための論文、農学研究の国際的展開の可能性を示す論文、あるいは先進的研究の成果を実際の問題解決のために用いたケースに関する論文などである。本誌は、以上のような論文を集積することにより、農学国際協力という学問分野の体系化、あるいは理論的根拠の深化をはかる。

2. 論文の種別および査読

本誌に掲載する論文は、原著論文、総説、ケースレポートその他からなる。原著論文は未発表のデータからなる研究論文であり、農学国際協力に関する新たな発見や考えを報告するものである。総説は、通常、編集委員会から招待された論文で、これまで発表されたデータや知見を俯瞰し、新たな考え方や論点を提起するものである。一般からの投稿も受け付けるが、その場合には編集委員会に相談されたい。ケースレポートは原則として未発表のデータであるが、例数などの不足により普遍的な結論を導き出しがたい場合にも、積極的にデータを公開するための論文であるが、基本的に原著論文として扱う。

投稿された論文は、編集委員長が担当編集委員を決定し、担当編集委員により選出された査読者2名により、査読を受ける。査読者による査読結果を受け、編集委員長が最終的な採否を決定する。

3. 投稿方法

農学国際協力への投稿は、基本的にデジタルデータを電子メールに添付するか、あるいはCDなどの電子メディアに保存したものを編集事務局へ郵送するかのいずれかの方法による。テキストデータはWORDなどのワードプロセッサにより作成したものを、docあるいはpdfなどのフォーマットで保存したものとす。図・写真等のデータは、pdfやjpeg、PowerPointなどの一般的フォーマットで保存したものとす。

4. 論文のフォーマット

論文は原則として、日本語あるいは英語で書かれたものとする。原稿は、A4サイズとし、上下左右に25 mm前後のマージンを取り、11ポイントのフォントで1ページあたり25行前後におさめられたい。査読の迅速化を図るため、行番号およびページ番号をつけることとする。A4用紙で3枚程度の原稿が、刷り上がり1ページ前後となることを留意されたい。論文の長さについては制限を設けないが、必要かつ最小限のページ数を基本とする。

いずれのタイプの論文においても、論文原稿の第1ページには、論文種別(原著論文・総説・ケースレポート、その他)、論文タイトル、著者名、著者の所属、代表著者名およびその電子メールアドレス、キーワード5個を書くものとする。論文原稿の第2ページには、400字以内の日本語要約と200ワード以内の英文要約をつける。

「農学国際協力」誌には自然科学および社会科学など、異なる領域の研究論文が混在するため、特に論文の形式を設けないが、見出し等を設けることにより、読者が読みやすい論文を心がける。

文献の引用については、本文中に数字で引用することとし、論文の末尾に引用文献を出現順に列挙する。以下の例を参考とされたい。

(1) Journal article

1. Lee VH, Fields PA. (1991) Rabbit relaxin: The influence of pregnancy and ovariectomy during pregnancy on the plasma profile. *Biol Reprod* 45: 209-214.
2. 前多敬一郎・東村博子(2007)生理的GnRH放出因子,メタスチン(キスペプチン)の基礎と応用. *家畜診療* 54, 589-594.

(2) Book chapter

3. Desjardins C, Lopez MJ. (1980) Sensory and nonsensory modulations of testis function. In: Steinberger A, Steinberger E (eds.), *Testicular Development, Structure and Function*. New York: Raven Press: 381-388.
4. 大蔵聡・木下美香・上野山賀久・東村博子・前多敬一郎(2007)生殖機能の神経内分泌メカニズム, 内分泌と生命現象, シリーズ21世紀の動物科学10, 長濱嘉孝・井口泰泉編, 日本動物学会監修, 培風館.

5. 投稿料およびカラーチャージ

原則的に投稿料は無料とする。またカラーの写真あるいは図については、事務局に相談されたい。可能な範囲で、必要なカラーページについては受け付けることとする。

6. 校正と別刷り

初回校正は著者の責任で実施する。別刷りについては事務局に相談されたい。

7. 著作権

「農学国際協力」誌に掲載されたすべての論文あるいは情報の著作権は、「農学国際協力」編集委員会に帰属するものとする。